

荒野のゴリラ

二十二世紀、それは某猫型ロボットのような未来都市の時代ではなかった。一世紀前からの度重なる森林破壊により住処を追われた動物たちは皆散り散りになって、それぞれの新しい場所に身をひそめて生き長らえていた。しかし、環境変化が原因で狂暴化する動物が急激に増え始め、人間たちに襲いかかった。

そして、人間たちと動物たちの壮絶な闘いが幕を開ける……

「八時だよーッ 全員集合ー！」

ここは対動物戦闘用自衛隊本部である。ド○フとは一切関係ないが、隊長の増岡さんはDVDとかすっごい持ってるすっごい熱心なすっごいファンだ。ついでに言うなら部下からの信頼も多分すっごいんだと思われる。そんな増岡さんを前にして部下たちは息をのんだ(のかな)。

「西の荒野に生息するゴリラの大群が近年、海を渡って日本に渡来し人々を襲い続けている。ゴリラに関する事件だけで年間約百件！やばいからそろそろどうにかしよう」

ゴリラはかつてその他動物と同程度の勢力であったが、三年前に一週間だけ起こった悪夢のような猛暑——後にGW(ゴリラウィーク)と呼ばれる——により世界各地が急激に干ばつし、荒野と化した。その影響だろうか偶然の一致だろうか、とにかくその時からゴリラが猛威を奮いはじめたのである。

「総勢約五千にもなるゴリラの大群は、どうやら三匹のボスによってまとめられているようだ。ゴリラの生態系とかぶつちやけよくわかんないけど、とりあえずボス抑えときゃもしかしたらどうかなるんじゃないかな」

ターゲットとなる三匹のゴリラにはそれぞれ人間が付けた通称がある。一匹目のボスは『フアング』。サーベルタイガーに似ても似つかない鋭い牙で人間どもをちぎっては投げるのだ。おそろしい。二匹目のボスは『キャンサー』。群れの中で最も大人しいゴリラかと思いきや、全身に人間だけを三日で殺すウイルスを纏っているのだ。おそろしい。

「三匹目のボスだけはこの私、増岡が単身で討伐しようと思う」

部下たちは驚きのあまりざわつく事も忘れた。三匹目のボスに単身で突っ込むなど、もう自殺行為でしかないと思われるからである。三匹目のゴリラは群れで一番のトップと言われている最強のゴリラだ。GWの後突然現れた新参のゴリラで、ゴリラの勢力が急激に上がったのもこの三匹目のボス——『坂口』の仕業と言われている。このゴリラは隊長・増岡の中学の頃と同級生でありガキ大将だった坂口にそっくりなのだ。そいつはしよっち

ゆう自転車のサドルを盗み、代わりにプロッコリーを現場に残すという悪行を繰り返していたのだ。おそろしい。しかし、増岡の一番の親友だった。

そして、ボスゴリラ討伐の時が来た。増岡を除いて部隊を二つに分け、フアングとキャンサーを別々に討伐するという作戦だ。ボスゴリラ以外は極力殺さないようにと指示が出された。限りある銃弾を浪費するわけにはいかないからである。日本は不景気なのだ。

日本は土地が狭く西の荒野と比べると地形が複雑だ。物陰に上手く隠れ、主に銃による遠距離攻撃でフアングは意外とあっさり討伐された。しかし、問題となったのはキャンサーである。奴が全身に纏うウイルスは地形を無視して半径2 km以内に広がる。土地の狭い日本では闘い辛い相手だったのだ。隊員たちはウイルスを遮断する特別なスーツを着用していたが、予想外にキャンサーの放つウイルスが細かくスーツの隙間から容易く入り込むので、スーツは全く意味を成さなかった。しかし、病に苦しみながらも隊員たちはほとんどかキャンサーを討伐し、その血液から抗体を作り出すことに成功したので犠牲はほとんど出なかった。死ぬ気になれば人間は何でもできるのである。

人間と動物たちの苦闘を高い崖の上からずっと見下ろす一匹のゴリラ……その背後に増岡が忍び寄り、銃口を突きつける。とっさにゴリラは振り返り、驚いたような顔をして叫んだ。

「ま……ままま増岡！増岡じゃないか！」

増岡も驚いた。当然驚いた。何故ゴリラが自分の名を知っている？そもそも何故ゴリラが喋る？という疑問が頭をぐるぐる廻ったが、数秒して増岡はそのゴリラが他にもない親友・坂口だと気付いたのだ。増岡は予想もしない形での突然の再会に言葉を失ったままだ。

「まさか増岡、おまえが自衛隊の隊長になっていたとはな。悲しい再会だな……。俺は見ての通り、あのゴリラどものボスをやっているのさ。お前たちを襲うゴリラたちの……な」増岡はまだ黙ったままだ。悲しい気持ちよりも、なぜ親友が本当のゴリラになっていたのかと疑問に思う気持ちの方が勝っていたという事は僕と君との秘密である。

沈黙を遮るように、坂口はまた喋りだした。

「そうだ、将棋をしよう」

中学の頃、坂口は将棋部だった。ほとんど帰宅部でしかないような空気の中、一人だけ熱心に将棋をやっていた坂口の姿を増岡は今でもよく覚えている。今となっては、将棋は坂口が過去に人間であったという唯一の証なのだろう。

わけのわからないままだであったが、二人は将棋を始めた。作者が将棋のルールをよく知

らないため詳しいことは説明できないが、とにかく坂口が圧勝した。勝負を終えた後、やっと増岡は口を開いた。

「あの頃のお前はもう少ししようもない駄目人間だったがよ、でも歩兵のようにいつかはと金に成って出世……そう思ってただろう。しかし今となっちゃむしろ、人間からゴリラに逆戻りよ。一体どうしちゃったんだ」

その言葉を聞いた坂口は眉間に皺を寄せて言葉を返した。

「ふん、逆戻りだと？ 傲り高ぶる人間など、と金にも成れぬどころか歩兵以下の屑じゃないか。動物たちの住処を荒らし、自分たちが襲われると逆切れさ。俺はそんな人間と同類であり続ける事が苦痛になってゴリラに成った。そして人類は滅ぼすべきだと思ったんだ」その言葉を聞いて増岡は急に青ざめた。

「では、GWの後からゴリラたちが猛威を奮ったのは、やはりお前の仕業だったのか」

坂口は悲しい顔をしていた。

「もう……人間と動物がわかりあうなんて無理だろ？ だから、さっさと諦めて人間を潰せばいいんだ。所詮人間など地球の癌細胞なんだからよ……」

落ち込む坂口を、なんとか悲しみから救い出そうと増岡は一杯の飲み物を差し出した。

「なんだそれは」

「青汁さ」

なんだかよくわからないが、坂口は物をありがたく貰う主義だったので青汁を飲んだ。一口飲んだ瞬間、やさしい緑が心の中を満たしていく……

「うまい……」

坂口がそう言った瞬間、緑の恵みが辺り一面に広がり、地球全体を包み込んでいった。人間と動物は何か思いついたように、争いをやめた。ある思いが脳裏をよぎったのだ。

——青汁を飲もう——と。

そして今、緑の中で共存する人間と動物の姿がある。もちろんゴリラもいる。そんな彼らの絆を支えるのが大いなる自然の恵み——一杯の青汁——である。

これからも、青汁は世界中の愛をつなげていくことであろう……。